
魔方陣に願いを

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔方陣に願いを

【Zコード】

N7310Y

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

千年のときを越えて、現代に降り立つ魔法使い。

黒き闇の中、最初の魔方陣を描く。

そう、とても優雅に。

しかし、優雅すぎたのか、桃野マリモという能天氣少女が偶然通りかかった。いきなりのトラブルに、戸惑う僕こと、ファウンは。それでも、マリモは勘がよすぎで…正体がばれる。

第一話 星の魔方陣（前書き）

魔方陣だ、魔法だ、超魔法だ。

第一話 星の魔方陣

僕は、現世に来た。

千年の時を越え、ついに来た。

僕は、魔法使いだ。名前は、ファウン。ある理由があつて、この時代、2000年代に来たのだが……。

そのためには、まず世界を見渡す必要があった。

共里越公園、午後七時。僕は、ここ地面上に魔方陣を書き始める。この魔方陣は、世界を見渡すという目的で使うこともできるし、世界から何かを呼び出す目的で使うこともできる。

千年の時を超えてるので、やたらと見慣れないものが多い。

しかし、次第に分かってくる。

やはり、この世界には無くさなければいけないものがいくつかあつた。

それは、この世界にある間違いの一つ、不平等と言つものである。要するに、言つてしまえば、世直しのためにこの時代に来たのだ。まあ、こいつら行動も非難されるべきものではあるが、いろいろあつてしたい行動だ。

僕は、久しぶりに空を見上げた。

のんきとしか言いようが無いが、僕としてもこの世界が新鮮で心動かされるのだ。

ここは、東京と言つ街らしい。

なんとなく、胸躍る世界だ。

おつと、そろそろ魔方陣を消さねば。と思つていると、そこには人が居た。

「ぐああああ、誰だ、キサマ。それを見たな！！」

「おっ、やあ。あたしは、桃野マリモ。不思議な魔方陣だね、映像

が見える

「」の秘密を知ったからには、お前の正体を暴く
僕は、魔方陣にその女について情報を求めた。
しかし、何にも映らない。

「いつ：一体何者だ。

「もしかして、魔法使い？」

ばれた。

常識的にありえないだろ。

「そうだよ」僕ははつきり言った。「つたく、こうなつたら……」

とりあえず、手駒にしておこう。

この時代に来て、早速トラブルか。

「魔法つて、どうやって使うの？」

「絶対に、教えない！！」

「ホントに魔法使いなんだね」

僕は、その少女について、地道に考えていたが。

どうやら、勘がいいようだ。

仕方ないので、魔法についてじゃなく、ここに来た理由とかについて話すことにした。

「しようがない。僕がどういう存在かと言つと、千年前の世界から來た魔法使いだ」

「あつ、時空を越えた魔導師的な？」

「ああ、君が言つとおりだ。正直、平安の世界はつまりなくってね。
一人で魔法の勉強をしていたんだ」

「でも、現代には、魔法つて無いけど」

「魔女狩り…みたいなのがあってね」

「へー」

「真面目に聞いているのか」

「いや、興味が沸いてきちゃって」「なんか、このマリモつていう奴、ポジティブだ。ちなみに、僕はネガティブに近いから、こんな世直しそうとじているんだが。

「何のために、この時代に？」

…、話すべきだらうか。

これを話すと、どうしてもこの世界への干渉が公になってしまつ。「えーっと、観光かな」僕は、ウソをついた。

「おお、いらっしゃましい」

「良ければ、近くに宿は無いかな？」

「あー、あたしのうち旅館だよ」
意外な展開だ。

「冗談だろ？」

「本当だよ。良かつたら来てよ。最近人が少なくなっちゃつて

「ああ、それは良かった」

「良くないよ。人が来ないんだよ。来ないうつ意味か、分かつてる？」

「売れない旅館でことだね」

仕方ないので、急いで魔法陣を消して、桃野マリモ推測16歳の家の旅館に行くこと。

なんか、嫌な予感。

…。

僕は、その後いろいろマリモの親達に挨拶し、状態を説明して、一つ部屋を借りた。

マリモは、颯爽と去っていった。マリモは高校生なので勉強があるらしい。

全く、厳しい親だ。まあ、僕にとっては、なんでもないが。

「魔方陣、完成」

僕は、星の魔方陣を書いた。

この魔方陣は、願いをこめることができる。

僕は願う。

「僕にこの世界の業を教えてくれ

業…。

この言葉が、僕のここに来た訳。

そして、この業が、ふとしたことで世界をも変えてしまうことを、

僕は知らなかつた。

未来が、変わるべき性。

それが、存在していたのだ。

第一話 星の魔方陣（後書き）

久しぶりの投稿なので、見てもうべるといいなと思つています。
これは、どんどん続きを書いていきますので。

第一話 運命の魔方陣

魔方陣が何故存在するのか、と言えば。
正確に、魔力を移すためである。

だが、その魔力と言うものが何処から来るのか。それは、人類が
考えもしなかつたある物体が必要であった。

『業を教えよう』

星の魔方陣が、語る。

窓から、月明かりがこぼれ、沈黙の時が流れる。

『業とは、この先起こる災いに通じている』

そして、魔方陣は力を失つた。

災い？

それは一体。

とりあえず、僕は、魔方陣を適当に描いてみることにした。
この魔方陣は、時間からエネルギーを抽出する魔方陣だ。
使いすぎると、世界のバランスが崩れる。

「ねえ、ファウンさん。」『飯ですよー、早くう

そう言つたのは、マリモだった。

僕は、仕方なく、一階に下りると…。

そこでは、歓迎会が模様されていた。

「ちょっと、どういっつ？」僕は疑問に思った。

「あなたが、少し寂しそうだったから。あたしはパーティーを開催
したのよ」

「馴れ馴れしい奴だな。僕はお前なんかとは次元が違う存在だ」

「うへ、酷い」

「ぐだらなー」とはあるが、一応楽しませてもらひ。ありがたく思つがいい、はははは」

そこには、おこしそうなおでんがあった。
中はぐつぐつと、食材を温める。

僕は丁寧に、いただきますをして、お箸でそれを取つた。

⋮。

その頃、放置していた、時の還元型魔方陣は。
その近くに、ある女が居た。

「けつ、あいつぐだらねえ事を始めようとしているみてえだな」

この魔方陣は、あいつしか知らない。平安の世では並び証されていたが、結局コイツは途端に居なくなつた。あいつは、裏切り者だ。

そして、その女は、魔方陣を誤作動させるように書き直した。
さらに、魔力を注入して、発動させた。

「タイムリミットは、一ヶ月だ」

一ヶ月以上の時のエネルギーをこの世界から切り離した。
そして、空に時計が浮かんだ。

一ヶ月で一周する巨大な針時計。

そして、その女は、魔法の箒で空を飛んでいった。

⋮。

「おー、ついにやるなよ。勉強はビツついた！」

食事が終了し、マリモのあほがくつづいてきた。

「正直、魔法が教わりたい次第です」

こいつは、きっと病魔だ。
知らないふりをしよう。

「わーい」

油断をしている隙に、彼女は僕の部屋に入りこんでしまった。
「おつとつと」「ん」と

「危ない」

マリモが、魔方陣の内側へ転びそうになつた。
僕は、この時気づいた。

時の魔方陣が、書き換えられている。しかも、魔力が注入された形跡がある。

この、書き方は…僕の親友だったレイチャラー・グラムの特魂。実を言つと、魔方陣のエネルギーである魔力とは、その人間が持つ魂なのだ。それを切り離して、エネルギーにする。
そして、魔方陣が存在する理由は、少しの魂で魔力を何倍にも高める効果のため。

そう、代価は魂だ。

マリモが、今魔方陣の内へ倒れしていく。

僕は、必死に止めようとした。

レイチャラー・グラムの魔方陣は、代価とする魂がかなり多い。
このままで…。

僕は、ギリギリでマリモの手をつかみ引っ張つた。
しかし、遅かった。

魔方陣は、マリモのわずかな魂の代価で動き出した。

時の消失。

僕らの世界は一瞬真っ暗になった。

しかし、世界は再び起動した。

「あ、あ、どうしたんだ」呟く、僕。

僕とマリモはさつまと向じ部屋に居た。

そして、世界も普通に動いていた。

「今、世界が崩壊しました。あなたに、助けて欲しい」

桃野マリモはさつきと違う雰囲気でそう発言した。

何かが、違う。さつきのマリモではない。

「私は、マリモの心の中で眠れる意志。先ほどの魂の置換によって、私の魂が表に出ることが可能となりました」

「くそっ、僕がいながら、まさか自滅か」

「いえ、これは必然です」

「必然？」

「あなたに、確かめて欲しい。運命の魔方陣で」

言われたとおり、僕は運命の魔方陣を地道に描いた。

そして、発動させた。

すると、空に巨大な時計が見えた。

「これは？ 何なんだ！」

「あれが、道しるべとなる。タイムリミット…。あなたは、運命に操られてしまう存在。そして、私が、あなたを変える存在なのです」
続ける、マリモ（裏）。「そう、あなたはレイチャラー・グラムの存在に気づかず、この時代に来てしまい、この最悪の未来が訪れようとしている。彼女が一体、どれほど世界を壊してきたことが」

「つまり、あのタイムリミット以内に時間を元に戻さなくちゃならないんだな」

「ええ、しかし、これは俗に言つ業が絡み合つているところ、奇奇怪怪な状況なのです。ゆえに、あなたは全力でこの業の絡みを解明しなくてはならないのです。これこそ、運命からの出題。これを、解決することは、あなたの願いを叶えることにも繋がっているのです。不思議なことに」

「僕の願いは、世直しだ。いつと恥ずかしいけど」

「ここの業には、世界を良くする結果が伴つ。あなたは、そのダブル・アンサーを見つけるしかない。それが、あなたを繋ぐ」

僕は、この地味な旅館で、のんびりと世直ししていくことを計画していたが。

ここからは、全く違つものとの戦いになることを語った。

僕は、そのマリモの正体にはつきりと気づきつつも。

魔方陣の力が及ばない、試練に動搖しながら、そこに立ち向かうしかなかつた。

第一話 運命の魔方陣（後書き）

自信がないけど、続きを書いていきたいと思つ感じです。気が向いたら、何度も読んで欲しい。

第二話 詳細のグラム（前書き）

これは、第一話レイチャラー・グラムの詳細です。

第三話 詳細のグラム

眠い。

そう思つたのは、必然だつた。
不老不死の身体だとはいえ、魔方陣を発動させると幾分疲れるのだ。

ところで、不老不死になつたわけは、一度死んでいるからだ。

つまり、私はゾンビというわけだ。

それでも、魔法で生きている。

これといって、不便も無い。

私は、偶然例の男、ファウン。いや、(F)がここに来たことを魔方陣で知つた。ファウンも千年後の世界へ来ていたということだ。「つたく、魔法使いとしては一流だが、どこかアイツは間抜けだ」私はこう考へてゐる、ファウンは優しすぎるのだ。

そういう人間は、何時か失敗する。失敗しても立ち上がれない。

上空百メートルを飛んでいる。

眺めが綺麗だ。

「ファームファームファーム」

そう鳴き声をあげた、ミニードラゴン。こいつは、私のペットだ。未来に居たとき、なんかついてくるのでペットにした。最初は、巨大なドラゴンになると思つて期待していたが、こいつはこれ以上成長しないようだ。

正直、呆れる。

最近では、鳴き声の意味が分かるようになつてきたくらいだ。
しゃべつて欲しいのが本当のところだ。

「どうした、何か反応があるのか？」

「ファームファーム」

あの、旅館か。

名前は、『桃野屋』で外装はちょっと古い。それにしても、あそこから魔法反応が。

一体、誰が？

「ファムファム、ファム」

えつ？ その前にこいつちつて？

私の魔方陣の幕は、進路を変えて、旅館の裏へ。

「あなたは…、ファウン？」

私達は着陸して、すぐにファウンに出会った。

「ファウン、久しぶりね」

なんとなく、照れながらそう言った。

そのとき、ファウンはこう言った。

『死人が、歩いてるよ。ケッケッケッ、お前はクズだ。最低な奴さ』

「仕方ないでしょ、それに最低つて…」

『この世界をオレは崩壊させん。お前もそれと同時に消す。邪魔するなら殺すぜ』

「お前こそ、死ね！ 信じてたのに」

私は、そうしてその場を去りつとしたが、その時たまたま魔方陣を見つけた。

その時、凄く悔しくて、気が動転して酷いことをした。

それが、世界を変えてしまふなんて知らなかつた。知つていたけど、もうどうでもよかつた。

もしかしたら、千年後の世界に来ること自体間違つていたのかもしれない。

それが、最悪の結果を生む。それに早く気づいていれば、魔方陣

なんて書かなかつただろつ。この結果も、世界が決めたことかもし
れないが。

私達は、どこかで道を踏み外した。

第三話 詳細のグラム（後書き）

少し、ストーリーの詳細を書いてみました。さて、本編の続編は、
また次回。

第四話 拡散の魔方陣（前書き）

第一話から

第四話 拡散の魔方陣

「あなたは、どうして…魔法で世界を変えたいの？ どうして？」

「そう、夢の中で呟く誰か。

「…、誰？」

「ねえ、どうして？」

「僕は…」

僕は、その理由がなかった。結局といふ、僕のしようとしていることに本当は意味が無いのかもしない。

「未来は、それぞれの行動の結果から作られる。そして…あなたはそれを理解していたの？」

「何が…、言いたい？」

「あなたが変えたことの中に大切なものが存在していたら…どうするの…？」

「それは…」

結局、僕は間違っていたのだ。行動に正義も悪も無い。結果が残る。

その時、腹部に衝撃があった。

僕は一瞬死ぬかと思った。

…。

「ぐあああああああ

僕は、高らかに叫んだ。

「起きた？」

そこに居たのは、にっこり笑っているマリモだった。

僕はその目に殺意を感じたので一秒で起きた。

それにしても、あいかわらず世界は動いている。どうして?

その時あの言葉を思い出した。

『タイムリミットがある、それをクリアするにはあなたは正解を導かなくてはならない』

そんなことを言つていた。

ふと、気づいたがマリモの内なる性格は表に出でていないようだ。

しかし、ちょっと試すか。

「昨日、転びそうになつたとき、僕は下敷きにされたんだぜ。酷いなー」

「うーん、そうだけ。記憶があいまいでさ」

「そりが…かなり痛かつたつていうのに

なるほど、憶えていないか。

適当にあしらうか。だが、今度の魔方陣は失敗しない。僕は、おもむろに押入れを開けた。

そこには、すでに魔方陣を書いておいた。そして、再び閉める。

「じゃあ、さらっと、僕は言った。

「つて、ご飯は?」

「五分後に行くから」

入り口を強制的に閉めて、密室状態。

そこで、また魔方陣の在る押入れを開く。

この魔方陣には、一つの物体を拡散させてあらゆるケースの対処を示す魔法がある。

おそらくこれで呪文を唱えれば、分かるだろう。

この先の出来事が。

「僕のいるこの世界が今示していることを教えてくれ

そう言って、自らの魂を代価に払う。指から自然に魂は出る。」

般に触れば自然と魂は移るということ。魂は、常に代価として払われている、それが生きるということであるから。

ビジョンが見えた。

『世界が、終わる…』『たつた三日で？』

『僕は何をすればよかつたんだ』

その言葉に、マリモ（裏）は答えた。

それは…。

『グラムの心の死…』

という言葉。

僕はその予知を聞いて、その意を悟った。

恐らく、グラムに関わらなかつた、そのせいであつた。

まだ、グラムに何が起こるかを調べていながら、どこにいるかなら大体知つている。

ここに来る前から、グラムの位置は大体分かるのだ。魔法以前に、僕達は親しく繋がつた仲であるから。特に深い意味はないのだが…。僕は押入れを閉めた。

僕はふと、布団に横になつた。

「何が起こつてゐるんだ…。まだ分からないことだらけだ」

静かに天井を見上げ、少し疲れを感じた。

「知らないところでいろいろなことが起こつてゐる。なんで僕はそれに気づけないんだろう」

その後、しつこくマリモが呼ぶので、渋々食堂へ。

「ねえ、これ…何ですか？」

「あー、おいしそうでしょ。私が作ったの」

「おいおい」

「これ、泥団子じゃないか。

知能レベル低すぎだろ。

と眞面目に思つて、よく見たらチョコレートの団子だった。

「なんて、泥団子っぽいチョコなんだ！……！」

それにしても、朝食これだけ？

「なあ、僕の朝食は、昨日みたいななのないの？」

「あーあーあーあ、もうない」

意味不明だ。

だが、もうここにいるだけ時間の無駄だ。マリモは天然で、ここ
の旅館の人もほとんど見てみぬふり。

呆れて物も言えない。

「とりあえず、しばらく外出するから。店番をよろしく」

「何処に行くの？」

「何度も言つが店番をよろしく」

僕は、人間転送を使つた。

これは、魔方陣を体に書いておくことでできる。

すると、向かつた例の場所にレイチャラー・グラム。通称レイが

居たのだった。

…。

「やつぱり、ここにいたね。レイ」

そこは、一面の花畠だった。

色とりどりの花が、あった。特に印象的なのがバンジーだ。レイ
が好きな花の一つ。

「相変わらず、花が好きだね」

そう話しかけると、レイは泣いていた。

「どうしたの？ これ…」

「え？」 驚いて振り向くレイ。

ハンカチを渡した。

「なんで、来たの？ あなたは世界を壊して自分のものにするんで
しょ」

…ん？ そんな設定？

僕は全く身に覚えが無いが…。

この空気は…本気だな。

「あつ、それは思いつきた。もつ全然そんなことをする気は無い」
適当じきまかす。

ちょっと適當すぎたのか、レイは感動したよつで。
「ほんとう? ほんとに? 私ずっと引きずつてて」

「あー、それは悪いことをしたね。心の底から謝るよ。つていうか、
それ僕の偽者か何かが言つたことだよ。魔法で化けていたんじゃな
いかな」

「冗談でも、嬉しい」

とりあえず、状況は良くなつた。

マリモ（裏）の言つていた、世界崩壊を止める方法つてこれだけ
じゃないはずだ。

んー、これからレイと共に行動しなくちゃいけない気がするな。
…。

その後、レイはレイのした業について話した。

「やっぱりね。それは分かつていいたけど、そんなことがあったのか」「
それより、あれは本当に偽者?」

「信じて欲しい」

僕たちは、そう言つて和解した。

これで、一つの障害はクリアしたといつこと。それにしても、レイ
が見た偽者つて、ずいぶん前から魔法使いの間で噂になつっていた
(デスマーテー)じゃないかな。

確信は持てないけど。そんな大きな組織のようなものが関係して
いる気がする。

これと言つて、証拠も無い今は、魔法に頼るしかない。

一つだけ確かなことがある。『あの日の出来事』にはまだ秘密が
ある。それだけは確かだ。

第四話 拡散の魔方陣（後書き）

地道に書いて、やっと四話。本当に時間は無駄にできないな。

第五話 勇気ある者とグランテック魔方陣

あれから、すでに口説いた。どうせ、タイドコッシュが元からいたし。

それにしても、レイチヤラー・グラムの見た僕の偽者の正体はデスマーテーだと確信できる。

「ところで、僕は今部屋にいるのだが、何故かケラムが後ろに居るゾンビなのに若々しい顔でにっこりといつちを見つめているのだ。

正直 実咲が悪い

תְּבִ�ָה

大丈夫か、
グラム。

「はあ?

モニ、相手にしないそ

それより、考えるべき」とか山ほどの、今まで見たいにのんきにして入られない。

何を考えているかと言へど
どの魔方陣が一番」の状況を解き明
かすのに最適かといふこと。

「かくそれ。」アリ千知らなしにかく

おかげで相変わらず元気みたいだ。

グラムも僕といてほつとしているのか、のんきだ。

僕は、ふとテレビを見つけた。随分前から、知っていたのだ。

魔法で未来をのぞくことができたから。

『謎の時計盤が上空に見えます。これは一体どうこいつ』とでしょう。この東京一体が、孤立した状態です。外部に連絡も通じません。私

達はどうなつてしまふのでしょつか

『もしかしたら、不思議な力がこの世界に存在しているのでは?』

『それより、宇宙人かもしませんよ。これは大発見だ』

』。

』。

最後の人、のんきだ。

テレビをしばらく見ていたが、相変わらず東京が孤立していることぐらいしか分からないな。

「ふあああ

最近あまり寝ていないので、目の下にクマができた。

「なー、グラムまたはレイ。お前の魔方陣でこの状況を解析することができないのか。お前なら、どんな凄い魔法でも不死だから使えるだろ」

「ん? それはね。いいけど、何が目的なの」

「そうだな……これをボードゲームだと考えて……戦況を教えてもららうとか」

一応、これでも大丈夫だから候補の一つを言った。

グラムは、早速魔方陣を書いた。でも、これは普通の魔方陣ではないようだ。

恐らく、これはグランデック魔方陣。

これは、一万年後の未来で獲得された究極の魔方陣だ。

「私は、未来のあらゆることを体験している。だから、こういうのも分からぬわけ無いでしょ」

自信満々に、グラムは言った。

とりあえず、普通の魔方陣よりは効果が期待できそうだ。

「じゅう、戦況とかって。かなり正しくないと、結果が期待でき

ないから』

ふーんと、僕は眺めていると、早速魂を挿入したようだ。

『LJの戦いの勝敗はすでにおおよそ見えている。しかし唯一の正解が存在する』

魔方陣が語りかけてくる。

『この戦いのポイントは勇氣…。どんな勝負でも勝敗を握るのは、危険を承知で進む強さ。その強さが、備わっている人間は、ファン（F）だけ』

…。

しばらく、魔方陣は何を言わない。

『すべては、神の意志で動く。戦況は無い。その中でも言えるのは、最後のファウンの勇気である。具体的に言つなら、デスマーティーには勝てないが最後にチャンスが来る』

その後、魂の持続時間が切れた。普通の人間の命なら100年分だ。見たところ、グラムは恐ろしい奴だ。

それよりも、驚くべきことはデスマーティーが存在することをほのめかしたことだ。

結局、デスマーティーの正体は教えてくれなかつたが、今までのことから、策略的陰謀を仕掛ける組織のようだ。

それによつて、世界を崩壊させる。シンプルな奴らだ。

それでも、神の意志が関係していることも驚きだ。最終的に神についてもさっぱり理解しようが無い。

『レイよ、どう思つ？ 死人として』

『その通りだけど、最後の言葉むかつくわね』

「いいから

「えーと。どうせなら思い切れってことじゃない？ 特にファウン。
あなたはきっと頼りないと思われているんだわ」

「グサツ。

傷ついた。

「しばらく、僕はマリモを探して、もつと有効な情報を得たいので
去らば」

「あたしも行く」

こうして、消費した三日間。

しかし、この三日間の過ごし方にも、問題があつた。
そのことに気づいたのはもつと後になつてからだつた。

マリモは、ついに行方不明になつた。

いや、もうこの世に存在していなかつたのだ。
デスマーテーによつて。

僕は、自分を追い詰め悔やみながら、旅館の一室へと戻つてきた。
そこには、グラムが何故かやばい状況なのに、にっこり笑つて立
つていた。

「もう、時間が一日しかない。駄目だ」

『いいえ』小さくそんな声が聞こえた。

グラムはもつと大きな声で言つた。

「過去を変えるわ。一緒に時間移動しましょ。私達は魔法使い、
それくらい余裕だわ」

過去に戻るなんて、平安の魔法には出来ない。
が…、グラムは未来の最新の魔法を知つている。
そういうことか。

僕は、それに気づいて、立ち上がつた。「まー、これは魔法使い

の定めつてところか

僕は、勇気を振り絞り、戦うべきときのために最善を尽すべし」と
硬く心に誓つたのだつた。

第五話 勇氣ある者とグラントリック魔方陣（後書き）

魔法使いはタイムトラベルができるのは、知っていますか。例えば、ハリー・ポッターのアズカバンでハーマイオニーが使っていたよね。ってなわけで、これもアリでしょ。見てくれて、本当にありがとうございました。ライフがゼロになるまで書き続けるから、そのライフが尽きたときが最終回ってことで。

第六話 追憶の世界（前書き）

あらすじ、ファウンとグラムは過去の世界にタイムトリップした。

第六話 追憶の世界

「グラム…。何してるの？」

幼いレイチャラー・グラムは何かをひたすらに書いていた。

「教えられないわ」

「えー、教えてよ」

「仕方ないわね。これが、世界を変える力を持つ魔方陣。ウソっぽくて笑っちゃうかもしれないけど、本当に効果があるのよ」

「ふつ、信じられないよ」

「笑ったわね（怒り）」

僕は思わず怯えた。それ以来、僕は何故かグラムに対して頭が上がらなくなつた。だから、正直僕と主の関係だつた。

そのせいか、時々グラムは魔法のことを教えてくれた。

ちょっとした、トラウマも多いが、それも思い出である。

ある日、グラムは魔方陣の本当の仕組みについて教えてくれた。

「魔方陣は、風と太陽をイメージして書くのよ

「風？ 太陽？」

「あなたみたいな間抜けには分からないでしょうから、大体でつかみなさい。世界が、風を意味する。風は何故起きるか。それは太陽熱によるもの…。そういう、大地の循環を基本ベースにするの。でも、やっぱりそれだけじゃ、人が力を借りることはできない、だから…」

（回想終了）

魂を使う…か。

懐かしいな、こうやつてグラムと一緒に居るのは。

グラムは、一流の魔法使いであり、僕の師匠だ。

だから、なんとなくその頃を思い出してしまつ。

グラムと一緒に過去へと飛んだ。そう、これは20XXXX年の僕がここに来た二日後である。

グラムを探しに言つてゐる間に、マリモがどこかへ消えた。ゆえに、世界がやはり崩壊するということで、僕たちほこの世界に真実を求め舞い戻ってきた。

場所は、やはり旅館の裏口。

「マリモが、何故さらわれたかが問題なのか。さらわれないよつてすることが問題なのか。どつちだらう」「

僕は、自問自答するようにグラムに尋ねた。

「難しいわね。とりあえず、魔法を使うつて言つのはどうだい？」

僕は、仕方がないので、この間役に立つた、道しるべとなる魔方陣を使うこととした。

「拡散の魔方陣ね。これは随分と古風なものを使うのね。私なら、もつと効果的なものを選ぶのに」

「いや、実はこれは一部書き換えてある。だから、未来で使われているそこらの魔方陣よりは正確だ」

魔方陣は、新たに発動した。

映像が、浮かんでくるのが、この魔方陣の特徴である。

『るんるん るんるん』

のんきに外を歩いているマリモ。どうやら、影の人格ではない。何故か、町を一望できる標高の高い広場にいた。

『この世で、一番美しいのは誰かしら』

そうマリモの後ろでささやいたのは、旅館に宿るはずのマリモの母親だった。

『あつ、ママじゃん。どうしたの？』

その時、彼女はナイフで刺され、崖の下にまつ逆さまとなつた。一瞬だけ、声もイメージで伝わってきた。

『私を助けて、ファウン。私はいろいろなものに狙われていたの…。とっても辛かった』その言い方は、紛れも無くマリモ（

裏) だつた。

僕は、そのイメージから考えられる、解決策を模索した。とりあえず、マリモは昔からいろいろなものに狙われる体质らしい。

今分かるのは、それくらいであり、マリモが普通じゃないのは会つた時から分かっていたことである。もしかしたら、運命かとも思うが、それは結果論だと割り切る。

「おい、ミスター・アンデッド」「ジョークのつもりだった。その時、グラムは思いつきり、僕の顔をグーパンチ。そうして、僕は永眠した。

さよなら。
さよなら。

「つて、死ぬものか！ 本当にすみませんでした」

「謝つても遅い。全く、ファウンは何時からそんなキャラになつたんだ？ 前は子供っぽかったのに」

「知らん。あんたがどこかへ行つたせいいだろ
…うーんと。

この話題は、また今度にしよう。

「ゴメンゴメン。殴りすぎちやつたね。それにしても、あんたマリモから好かれてるね。まあ、それよりも…。正直、マリモが後数時間で断崖絶壁から落下してしまうという運命は問題よ」

「ああ、それは理解している。しかし、これはどっちを止めるべきなんだ。マリモの母さんか、マリモの行動か」

「それは、当然どっちもよ。まずは、マリモに定めを教えるしかなりわ」

僕達は、じうじて、マリモが通るであろう『篠原元広場』という広場へ向かうことにした。

だけど、本当に、僕は頼りないな。

本当に、勇氣あるものになれるのだろうか。しかし僕は、魂をす

り減らし戦うのみ。

向かう道で吹いている風が、ものすごいくらいのは、人生と似ている。

そして、きっとその先に希望があると信じてこる」といふも。

第六話 追憶の世界（後書き）

かつこつけな感じで、魔方陣はクールですよね。魔法力ツコイイ。最高。オタクになりそうですね。なーんて、特に詳しいわけではないですが。

第七話 マコモの謎(前書き)

そろそろ、謎が解けていく。

第七話 マリモの謎

マリモを、僕達はようやく見つけた。

そこは、真っ暗で、街灯も少なかった。

「あつ、居た」

僕は、あからさまに言った。それに、マリモも気づいた。

「ん？ なーに、ファウン？」

とりあえず、説明することがある。

前にも言ったように、マリモが殺されるといふこと。

「お前は、数時間後に殺される。お前の母親にだすると、マリモは突然笑い出した。どうやら、バカにしているようだ。

かなり、不気味だ。

「前にも言ったけど、この世界には秘密が存在していることが多い。実は、それがこの間に現われるから。あなたの魔方陣にウソの情報を紛れ込ませたのよ、私は？」

「は？」

グラムは、しばらく何も言わない。何となく、知っていたのだろうか。それとも…動搖しているのか。

「あなた…、この世界の創造主じゃ…ないでしょ？」グラムは重い口を開けた。

その質問に、マリモはこう答えた。

「それ、全くのお門違い。それなら、ここまで不便な世界にはしないでしよう。それに対して正確な答えを返すなら、私は特別な存在。この世界においてたつた一人の特異点。そう…どこかのゲームや、アニメにあるそういう存在。ゆえに、この世界に魔方陣形式の魔法が存在することに気づいていたわ。本当は、表の人格を作る必要はなかったのだけれど、例の『デスマーティ』通称悪の組織に対抗するためにあえて身を隠していた。しかし、今回の一件はガセ」

僕もいろいろと質問したいことがある。

「なあ、マリモ。お前はどうしてこの時間帯にその何かがあるって分かったんだ？ それが何かを教えてくれよ」

「見ていれば分かる」

突然、空から雨が降るよひ、「粉のよひなものが降つてきた。しかも、その粉が何かを描くように綺麗に並んでいく。

「魔法ね」グラムは、断言した。

僕は、その並び方で最悪の魔方陣が描かれていることに気づいた。

「神が、…魂を欲しがつている」

神の逆鱗魔方陣。
ゴッドズ

「そうです。今、世界は暴走している」真剣なまなざしのマリモ。

ありえない、あの魔方陣はこの世に存在しない物質を代償にしないといけない非現実な魔方陣。

これは、タイムトラベルにタキオン粒子が必要なことと同列。あの、魔方陣は、『死』を代償にして描かれている。全く逆の性質だ。

「死を代償にできるのは冥界に行つた者だけだ」

そうマリモ（表裏）は言つた。

「神が、魂を欲しがつているのは何故？」
グラムは、叫ぶよひに、呟いた。

僕は、マリモが知っていることに気づく。

「教えてくれ、マリモ」

「どうやら、言ひしかないようですね。これはもはやすべてを知つてこるわけではないのですが。神の逆鱗に触れた理由をお話します」。

…。

徐々に魔方陣が描かれる。

そんな中、話が始まった。

「あの日…、すべてが壊れました。それは、ファウンさんが私の家に遊びに来ておもしろ半分で魔方陣を書いたことによります。最終的に何の問題も無いように何も起こらなかつた魂の一部の吸收」

「それがどういう?」「グラムは問いかける。

「私の魂は、ウルトラレアだといえば分かりますか。中毒性があるんです。あなたたちならお分かりでしょうが、魂の種類はたくさんあるのです。私は、人類にこの先大きな影響を与える、存在だったのです。そこにあなたたちが時を超えてやってきた。それは世界にとって大きな誤算です。もはや、世界も崩壊せざる終えなくなつたのですよ。そして、今回の魔方陣が示すように、私の魂を世界が奪いたいと考えている。イワカル、リセットです。神や、仏陀にとっては世界の一つや一つ、どうつてことありません。間違えたら作り直せばいい。きっと、魔方陣の存在が、すべてを崩壊へ導いたのです。しかし、悔やんでも仕方が無いのですよ。魔方陣は、決して敵ではない。敵は、この世界そのものだった。ようするに勝てばいいんです。死にたくないでしょ?当然、あなたなら、もうすでに分かつていてるはずでしょう」

そう言って、マリモは、僕を見た。

レイチャラー・グラムはちょっと嫉妬していた。

「ああ、僕は、最後に役に立つ切り札なんだろ？。」

「ええ、といいで、今からどうすればいいのかを二つに分けて説明します」

そして、マリモ（表裏）は地面に文字を書いた。

「言つておきたいことが一つ、決してあの日に起つた、魂の吸収を止めてはいけないです。それは、神に対する冒瀆であるからです。それをしたら、その時点で世界は滅びるでしょう」

一つ、神の場所を探す。恩からず眞界。

二つ、神に交渉する。

「なあ、神つて本当ここいるの？ 有り得ないだろ」

僕は、徒然と言つた。

「常識的ですね。細かいことは後で説明しますよ」
そう言つて、マリモは、その場を去つていった。

…。

…後日。

「デスマーテーがどうこう存在か、あなた達はまだ分かっていないようですね」ものす、――――――、上から田線でマリモは言った。「えーっと、デスマーテーはこの世界特有の副産物であります。まあ、他の世界なら飢餓や貧困、災害などさまざまなものであらわれるのです。いろいろありますが、この世界ではそういう、元から備わっている特性のようなものとして、デスマーテーが居るのですよ。あなたなら分かるでしょう。そして、デスマーテーこそ、この世界で倒さなければならぬし、完全に倒してもいけない存在なのです。だから、ほどほどに戦えということです」

なーんて、訳の分からぬことを、のんびりマリモは言つたのだ
つた。

本当がどうかは、すぐはっきりしたのだが…。

僕が、凡凡に冥界へ行く魔方陣を書いていると、手伝いもせずにグラムは、なんか近頃、僕に色々を使ってくる。

全く、状況が分からぬ。

グラムは、いつもはしつかりしているのに、なんかぼーっとしているようだ。

世の中は不思議で一杯だ。大体、神つてなんだよー、って思っちゃうな。

第七話 マコモの謎（後書き）

小説を書くのは、大変です。そんな不条理ありながら、僕は今日も執筆を続ける。

この作品を、どう思いますか？

第八話 詳細のマリモ（前書き）

本編とは離れたこれは、七話で一人を待っているときのマリモの行動についてです。

第八話 詳細のマリモ

「あーあー、世界がここまで滅びかけるとは…」

私、マリモは例の広場で空を見上げていた。

まったくと言つていいほど、本来の状態からズレている。

ここまで来ると、戦争が起こつてもおかしくない。

私にとつて、この世界はただの世界ではない、永遠に住む世界だ。

私は、人の身体を移動して生きている。時に、その体の中の人とコンタクトも取る。

それは、私の使命だから。

「この世界が求めるとき時、私は現われなくてはならなかつた。しかし、今回の事件の原因は私の注意不足…本当に世界から孤立してしまつた」

外は、真っ暗でどうしようもなく悲しい。

不自然な答えには不自然なものしか帰つてこない。

それと同じように、こんな世界では、きっと何も生まれない。

…。

少し、ボーッとしていると、なんとなく背後に黒い気配を感じた。すぐ振り返る。

「あなたね。この世界に選ばれし者の一つ、デスマーティーは」

目の前にいる黒い影。

それが、徐々に色濃くなり、ようやく姿形がはつきりする。邪悪なマントに、人間の中でも不気味な狂気の男。

「貴様を消そうと思ったが、消せないようだね。貴様はすべてを知つた上で行動しているから。本当は貴様が神なのでは？」

男は、にやりと笑つた。

その質問に、私は答える。

「お前は… デスマーティー幹部の一人か」

「ああ。そうだ。最終的に君がこの世界に居続けるといつのまどりやら決まっているようだ。しかし、あの二人はどうかな？あのフ[アウンと死の保存は…](#)」

「それも、私は知つてるとしたら？ それくらい造作も無いことだから」

「ふあはっは、それは流石にムリだ。お前の行動力は限られている」

「でも、あの子たちには力がある」

「そうか…、じゃあその言葉をいづれ確認するとしよう。今だけは、世界の崩壊が止められているが、それも直に無くなる。その先に我々はいる。いずれ、戦うことになるだろう。神を探すことはできるかな？ それとも、我々に泣きつくか？ 協力はしないが、ヒントを『』える」

「…」

「神は、見えない。フフ」

…。

…。

神が、見えないの意味はまだ分からない。
だが、きっと、行き着く場所に答えはあるだろ。その答えを見つける」とこそが、きっと私達の使命なのだ。

「」の世界を救うことが、できればきっとデスマーテーが関係してくれる。それが分かった。しかし、それにしても、寒い。もつと厚着

にしてくればよかつた

半そでの、スカートはこの時期キツイ。

僕ことファウンは、思う。この世界にあるものすべてが、幻なの
だと。何故なら、それくらい時間の中では儂いから。だけど、僕達
は信じて前に進み、今自分が何ができるかを考えなくちゃいけない。
そして、いざれ辿りつきたい。
この世界に隠された、秘密と。
たつた一つしかない、僕ら自身にとつての真実に…。
これから、終わりが始まる。

第八話 詳細のマリモ（後書き）

現実は本当に厳しいものであると、最近思つ。ところが魔法があれば、そんな心配は全く無いとも思う。

さて 感想が少しくらい欲しいな。面白くないなら、仕方ないんだけどね。でも楽しんでもらえれば、いいんだから問題ないよ。

第九話 神に会つには…（前書き）

本編です。

第九話 神に会つには

僕達は、迷宮のよくな、この世界にいる。

…。

「ふあああ、魔方陣は書き終わったけど。これを巻物にしておくことで、一体どうなるっていうんだ？」

僕は、露骨に尋ねた。

ちなみに、この時間は、タイムリミット三日後の最後の日だ。行ったりきたりしているから、もうよくわからないが。

「私は、もうすでに神にあう方法には見当がついています」

「え？」

「シンプルですよ。実は、例の私の魂の一部がとられたとき、そこには神がいたのです。つまり、神に会うには、その私の魂が取られるという状況の中、あなたが書いた魔方陣で、神の世界に入り込めばいい」

「なんで神がいたってわかる？」

「魔方陣は、実は神を呼ぶ作業だからです。だから、世界崩壊まではじめた」

「初耳だな」

僕が、じつと考え込んでいると、レイチャラー・グラムも、意見を言った。

「あたしも、神の存在はイマイチ信じられないけど…正直そこに神

がいたと考えなれば、いや神の一部でも存在していたと考えなければいけないんじゃないかしら？」

「ふーん」僕は、イマイチ納得できないが、大体分かった。「ん？じゃあ結局タイムトリップして、過去にいくわけだろ？」

「はい」マリモは答えた。

…。

…。

…。

僕達は、あの田の瞬間に戻ってきた。もちろん、姿は見えないよう透明になつて。

「ちょっと、待てよ。神にあつたとして一体、どうするんだ？」

僕は、質問した。

「深く考える」ともあつません。気合です

「気合へ…」マリモの適当な言葉に、少し不安になる。

グラムは、ここで何故か決心して、思いを伝えることにした。
「ファウン…あたし。あなたのことのが好きでした」

驚きつつも、僕は冷静に。

「薄々分かっていたよ」と言った。

ここで、断つたら殺される。

僕は、恐怖を感じた。

「あー、えーっと」グラムの、田が鬼のよくなつていく。
オドオド。拳動不審。

しかし。

マリモは全く無視した。恐らく、ふざけている場合じゃないのだ

る。ひ。

「最後に、忠告すべき点があります。私達は、いつだつて繋がつて
います。だから、どんなことがあつても、不安になつたりしないで
ください」

僕達は、無言で頷いた。

そして、僕は神の世界に行くために、特殊な魔方陣『MH6魔方
陣』を発動させた。

皆の、魂を代価に。

「僕達は、また会える。必死に立ち向かつたその先に、きっとい
事があるぞ」僕は、このセリフがどうしてもいいたかった。

僕達は、じんなとこりで終わるようじや駄目だからだ。

その後、魔方陣は急速に発動し。

最初に使つた、魔方陣を主軸に、光が広がつていった。

…。

僕達は、神の世界に着いた。

しかし、そこは神の世界だとは思えない世界だった。
空気が汚れ、すべてが邪悪に染まる。闇の世界。

「息が苦しい」

振り返ると、どこにも一人は居ない。

どうやら、バラバラに飛ばされたらしい。

僕は、あまりに汚れた空気で氣を失いそうになつた。
『起きて、ファウン。あなたはこんなものじやないわ

謎の声。

この声は…。

この声は確か。

それは、希望の光だった。

『この先を、ずっと行けば、神の核である母体にたどり着く、そこ

へ行きなさい』

僕は、正気になつた。

究極魔方陣、起動。

「僕は今、神をも凌駕した」

それは、マリモの切り取られた魂の声だった。

そう、マリモは僕なんかより、よほど救世主だった。そこに僕が

まぎれてややこしくなつた。

だから、その借りは、僕がこの魔方陣で返す。

究極魔方陣は、その魂の半分以上を削り取る。しかし、それでもしなければ勝てるはずが無い。

「待つてくれ、マリモ、グラム、そして滅びかけている世界よ」

第九話 神に会つには…（後書き）

一気に、クライマックス。正直、ここまで魔法物が難しいとは。思いつきり、最終回に繋がっています。僕達は、魔法で繋がっている。だから、最終回を楽しみにしてください。

君たちの、世界にデスマーテーが居るとしたらどうしますか。恐らく、気づかなかつたら、騙され続けますね。では主人公の最後の賭けに、世界は感動するのか、しないのか。とりあえず、楽しんでもらえばいいですね。

最終話　さあやがて（複数形）

最終です。

最終話 bad end

僕は、この世界で呼吸している。

僕は、全力で走っている。

神がどこにいるかは、分からぬけど。

とりあえず、走る。

さつきの声は、もう聞こえない。

『ふあはははは』

突然、笑い声が聞こえた。

目の前には、暗闇よりも真っ黒な存在デスマーティーが居た。

『私を忘れては居ないか』

「何しに来た？ 僕は今から世界を救う

『まあ、聞け。神を倒す方法にあてがないだろ？』

『そうだけど』

『ふ、では教えよう』

デスマーティーは、僕にこうひと言った。

『不完全な魔方陣を使え』

『どういうことだ？』

『不完全な魔方陣は、神が創りえないものだ。つまり、その時点で

神はイレギュラーに対応できなくなる』

『でも、どこでこんな情報を…』

『まあ、気にするな。不完全な魔方陣には三分の一の魂を掛ける必要がある』

『はあ、それじゃあ僕の寿命も三分の一になるだろ』

『気にするな』

『さつきから、そればつかり』

『気にするな』

『あんた、本当に悪の代表かよ』

『甘いな

そう最後に言つて、デスマーテーは去つて行つた。

その後、僕は神の母体を見つけて、自分の魂の三分の一を犠牲にして、神を粉碎した。

さすが、魔方陣といつたところだ。

しかし、どこかに腑に落ちないものが残つた。

元の世界に戻つても、マリモとグラムは存在せず、僕は孤独な一

生を送つたのだった。

最終話 bad end (後書き)

この物語は、このバッドエンドで終わりに見えないでしょ？
まだ、この物語は続く。しかし、これがこのファウンの限界なのです。
本当なら、あの二人を探すべきだった。

デスマーテーの罠にまんまと引っ掛けたというわけ。それが、
デスマーテーの仕事だから、当然ですね。E／N／Dです……ありがとうございます。
といいつことにこの世界バッドエンドばかりですね。少なくとも、僕はそうですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310y/>

魔方陣に願いを

2011年12月1日15時49分発行